

技術課の活動 20年の歩みと、この10年 (1987年～1997年)

技術課長

服 部 宏 之

基礎生物学研究所の20周年は、私が技術課に赴任して18年目にあたり、前任者から課長を引き継いで6年目を迎える。しかし、この1987年以降の10年間は、研究所の教官の入れ替わりに相まって、技術課のメンバーの多くが転出し、又新しい人を迎えた激動の年でもあった。この間、岡田節人所長、竹内郁夫所長、そして現在の毛利秀雄所長と変わられた。いずれの所長も技術課運営に深いご理解を頂き今日の発展を遂げることが出来た。10年前24名（定員25名）だった技官が、定員の漸次増加に伴い平成3年には、最大の35名となり、第8次定員削減で3名減となり、現員（定員共）は32名である。この間新卒者を含む32名を採用し、24名の技官が技術課を去った。研究所の教官も世代交代があり、生物学の技術も分子生物学の進歩に伴いその要求される内容も大幅に変わりつつある。その中で、今後どのような技術が求められ、どのようにしてレベルの高い技術者を育てていくかが技術課の課題である。

この間の技術課の10年の歩みは、その前の10年の蓄積の上に以下の変遷をたどってきた。

1、技術課組織の確立

技術課は創設期より、所長直属の「専門技術を持った技術集団組織」としてスタートし、「技官は全て技術課に所属し、各施設、研究部門に出向し業務を遂行する」システムが、所長、教官の協力の下で定着してきた。

2、技術課の運営

技術課は、毎週月曜日朝8時45分よりミーティングを開催し、課長報告、各担当者報告等を行い、情報交換を行っている。又、各自の日常業務に関連する技術内容をまとめて発表する場として、セミナーを行い、技術交流を深めその向上に努めている。必要に応じ研修を行い、共通の基本的技術の習得の機会も作ってきた。年度末には各自の業務報告書を課長に提出し、課長は各自の業務内容とその進捗状況の把握につとめている。

2、技官の採用

1985年以降は、国家公務員中級（その後2種）の「化学・農学・電気」の合格者名簿より候補者を選び、所長を含む選考会で面接し、技術課として採用し配属先を決めてきた。これによりレベルの向

上と均質化が行われ、技官の所内での人事異動が可能となった。

3、技官の人事異動の制度化

技官の所内の人事異動は、支援業務のマンネリ化を防ぎ、仕事の幅を広げるという見地で1988年に「所長メモ」の形で承認され実施された。以後、資料に示すように、半数以上の技官が一定の年限の後、所属先を異動し、それぞれの新しい部署で活躍している。

4、生物学技術研究会の発足

1988年より、全国生物系技官に呼びかけ「生物学技術研究会」が発足した。これにより、全国の生物系技官がそれぞれの技術内容をまとめて発表し、交流する場をつくることが出来た。これまで、研究所の枠内だけでの活動から、全国の優れた技官との技術交流が可能となった。現在では、毎年3月、所外から平均33大学・50名近い技官が参加し交流している。

5、前課長の退官と引き継ぎ

1990年3月31日をもって、本多前技術課長が退官され、服部が課長を引き継いだ。

